

大地に生きて 大空に心ゆだね！

新型コロナウイルスの感染拡大が心配な状況が続いていますが、これまで以上に、健康管理、手洗い、換気等の徹底に努める一方、コロナの不安を打ち消す明るく元気に前向きに、そして、コロナによる偏見や差別のない学校づくり、社会づくりの担い手として日々の生活を送ってほしいと思います。

この新型コロナウイルスの出現により、学校生活も様々な制約を受けるようになりましたが、私が残念だと思うことの一つに、全校生徒全員が歌う生の校歌の歌声を今まで一度も耳にする機会がもてないということがあります。そこで、今日は、「校歌」についての話をします。

＜校歌のテープを流す＞

舞いおりた白鳥は聞く
遠い砂丘のドラム
吹雪の奏でるフリユート
それは太古の歌
太古より川は流れ
風は砂嘴(さし)をのぼす
堆積をはさねかさねて
湖(うみ)のある野を創った
人は土を耕し
風と土にうちかつ
みのり豊かな野を拓き
光をあびてここに生きる
われら今学び舎の窓を開き
新しい希望の世紀(とき)に向かう
歌おうよ光と風と水の讃歌を
大空に心ゆだね

山潟中学校の校歌は、開校に合わせて昭和 58 年に創られました。作曲は、後藤丹(まこと)さんという、新潟市出身で新潟大学や上越教育大学の先生を歴任された音楽家です。

作詞は、十数年前にもうお亡くなりになっていますが、今西祐行(ひろゆき)さんという有名な児童文学者の方です。

CD で初めて校歌を聞いたとき、メロディーもすばらしいのはもちろんですが、公立学校の校歌には珍しく、校歌としては斬新だという第一印象を受けました。『遠い砂丘のドラム』『吹雪の奏でるフリユート』。どこかメルヘンチックで詩情あふれる素敵な歌詞です。

そこで今回は、特に、校歌の歌詞について考えてみたいと思います。

当時の記録を紐解くと、今西先生は、山潟中学校の校歌の作詞を学校から依頼されて、新校舎が完成して間もない昭和58年7月30日に、作詞の構想を練るために、作曲担当の後藤先生と共に学校を訪れました。当時の校長先生に、真っ先に屋上に案内されました。

太古の昔に東頸城丘陵の北端にできたという二つの小火山、弥彦山と角田山、そこに絶えず吹きつける強い北西風が、日本海に長い砂嘴をのぼし、信濃川や阿賀野川から運ばれてくる運搬物を保護し、そこに越後平野を創ったという、壮大な自然の悠久ドラマを今西先生は思い巡らせました。そして、目の前の広大な湖沼地帯が、今見事なまでに真っ青な田園として広がっていることに、深い感動を覚えたのです。

その後、真新しい建築材のこもる音楽室に入りました。まだ誰も触れていないピアノで、後藤先生から、構想中の作曲作品をひいてもらいました。密閉された教室がとても暑かったので、今西先生が急いで窓を開けたそうです。すると、青い稲田のにおいのする風がサッと吹き込んで、ピアノの上の譜面を吹き飛ばしました。

そうだ、「この風を描こう！」と今西先生はひらめいたのです。これが、山潟中学校校歌誕生ヒストリーです。

今西先生は、農業にもたいへん関心が高く造詣が深く、「お百姓さんに限らず、人間のする本当の仕事というのは、何かを作りあげることでも、掘り出すことでもなく、自然の本当の実りを待って耕すことではないか」と常々言っていたとのことです。ですから、校歌の中にも、『人は土を耕し』『風と水にうちかつ』『みのり豊かな野を拓き』などと歌われています。

カルチャー(culture)という言葉があります。一般的には「文化」とか「教養」という意味で、今や日常的に当たり前に使われている言葉です。でも、辞書を引くと、第一義は「耕す」「耕作」「栽培」と記されています。カルチャーは、元々は「耕す」という意味で、文化とは、すなわち「耕す」ことなのです。

文化を拓き教養を身に付けることは、まず耕すことから始まるということです。私たちは、これからどのような新しい時代を耕し新しい時代を切り拓き、新しい時代をどのように生きていけばいいのでしょうか。

何はさておいても、まず最優先に耕すべきは、私たち一人一人の“心”であると私は思うのです。

来年度、山潟中学校は創立40周年を迎えます。このすばらしい校歌を、全校で心おきなく大声で歌える日が、一日も早く到来することを祈って、共に心を耕しながら、新しい時代を力強く生きていきましょう。